

THE PORTRAIT OF A LADY

における受苦の精神について

—HENRY JAMES の作品研究 (II)—

江 口 裕 子

人間の魂の中にはまだ存在していない場所がある。それを苦悩がみたすと、それは存在するようになるのだ。

Léon Bloy

I

The Portrait の物語の冒頭で、Isabel がアメリカの野の朝露をまだそのまま身におびたような姿を Gardencourt に現わしたとき、彼女のヨーロッパでの生活には限りない可能性が約束されているように思われた。財産もなく孤児となった Isabel の Albany での生活は、閉鎖された小さな世界にすぎなかった。彼女が閉じこもって読書にふけていた、“office”のある家の玄関には、いつの昔からか門がおろされ、明り取りの窓には青い紙が帖ってあって、外の街路をのぞくことが出来ないようになってい。Isabel は、その門に手をふれたこともなく、窓の青紙をはがして外を見たいとも思わなかった。このように外界から遮断された Albany の家は、その頃の Isabel の小さい、限界のある生活の象徴にほかならない。彼女はいわば、窓の外の街路が象徴する現実の人生と断絶した、閉された世界のなかで、観念と想像をかてとして生きていた少女であった。その小さな世界のなかで、自由への夢だけは無限にひろがっていた。Touchett 夫人に連れられて、ヨーロッパの世界へ出て行った彼女は、そこで思いがけず莫大な遺産を贈られることによって、暫らく自由を享受する期間をあたえられるのである。物語の前半における Gardencourt での生活は、いわば苦い経験の木の実を食べない前の、無心で平和な楽園の生活そのもので

あり、彼女の自己肯定と自己拡張の時期である。第三十六章以後の後半は、逆に自己否定と自己放棄を余儀なくさせられる時期であり、ローマの Osmond 邸、Palazzo Roccanera での生活は、逃れる道のない孤立と断絶の生活である。Albany の生活には想像の自由があったが、Palazzo Roccanera の生活は、そうしたすべての幻影の崩壊を意味し、もっとも緊密であるべき筈の夫 Osmond との関係は、彼女が夢にも思わなかった冷やかな不信と蔑視によって、断絶させられている。Isabel は、自由な自己発展の夢とはうらはらな、より深刻な「閉された世界」のとりこになってしまうのである。Isabel の、この現実の悲劇的な認識は、一つの極限状況、地獄のイメージであらわされている。

She had taken all the first steps in the purest confidence and then she had suddenly found the infinite vista of a multiplied life to be a dark, narrow alley with a dead wall at the end. Instead of leading to the high places of happiness, from which the world would seem to lie below one, so that one could look down with a sense of exaltation and advantage, and judge and choose and pity, it led rather downward and earthward, into realms of restriction and depression where the sound of other lives, easier and freer, was heard as from above, and where it served to deepen the feeling of failure. It was her deep distrust of her husband—this was what darkened the world. . . Then the shadows had begun to gather; it was as if Osmond deliberately, almost malignantly, had put the lights out one by one. The dusk at first was vague and thin, and she could still see her way in it. But it steadily deepened, and if now and again it had occasionally lifted there were certain corners of her prospect that were impenetrably black.

このように Isabel の人生に、楽園から地獄への急速な転落をもたらした Osmond との結婚の実相は何であったろうか。Isabel は、Merle 夫人と Osmond の冷酷な策謀の犠牲となった純真な少女であるとはいえ、彼女をより悲劇的なヒロインとしているものは、さげ得べき結婚を正しいと信じてえらんだが故に、この不幸な運命に対して、彼女自身が責任を負っているという点である。それでは Isabel は何故 Osmond のような人物を結婚の相手としてえらんだのか。そしてまた何故結末において Goodwood の救いの手を拒絶して、ふたたび Osmond のもとへ、彼女の地獄

へともどって行ったかという二つの点が、この物語のもっとも重要な問題点となる筈である。

Isabel が二人の、より誠実な求婚者をしりぞけて、Osmond をえらんだことについて、彼女が Osmond の本性を見ぬく洞察力がなかったものとして、批評家のあるものは Isabel のことを “inconsistent” であり、“suggestive of the nincompoop, clearly proceeding from a brain whose ethical world was but chaos.”¹ といい、またあるものは、“ignorant, self-centered and afraid,”² と評し、また Quinn も Isabel の聡明さの不足に帰している。³ しかし、これらの意見は James 自身を満足させるものではなかろう。彼女のあやまった選択が、経験の未熟さ、自己過信、知性の illusion の結果であることは誰しも認めるであろうが、James 自身は、その誤ちを彼女の人を疑うことを知らぬ、寛容で高潔な天性に帰しており、それは許されるべきもので、責められるべきものではないという態度をとっている。James は結末に近く、Ralph をして、“I don't believe that such a generous mistake as yours can but hurt you for more than a little.” といわせていて、Isabel の誤ちに対しては思いやりのある弁護をしており、読者が彼女を所謂「科学的批判」の対象とせぬことを望んでいるのである。実際、読者は Isabel の未熟さや愚行にもかかわらず、人間的な純粹さや、倫理的誠実さによりつよく印象づけられるにちがいない。

Isabel が Osmond をえらんだ理由は、無論、彼女の理想や結婚観にてらして、Osmond の中に彼女の完全欲を満足させる解答を見出したと信じたからであり、その選択はそれまでの彼女の考えや信念と矛盾してはいない。Isabel は、自由や独立や優越の観念の信奉者であり、彼女自身も優越意識をもった自我的人間であり、女性としては特殊な、オリジナルなタイプの人間なのである。Osmond はそれを極端にしたような人物であり、自分の生活圏内にある一切のものに自分自身を映さずにはおれぬ自己耽溺

¹ Rebecca West, *Henry James*, New York, 1916, pp. 69-70.

² Quentin Anderson, *The American Henry James*, New Brunswick, N. J., 1957, p. 197.

³ Arthur Quinn, *American Fiction*, New York, 1936, p. 288.

型の間である。二人の間にはある程度共通点があって、Isabel が Osmond の中に自己の延長を見いだしたのはある意味で無理からぬことであつた。一方、審美的批評家の Osmond が Isabel のまれなオリジナリティに注目したのは当然である。いわば二人とも相手の中に自己を映す鏡を見だし、互いを必要とした Narcissist であつたといえる。

Isabel は浪漫的な理想主義者であるから、Ralph や Touchett 夫人が手きびしく批判した Osmond の否定的な性格や、怠惰な生活態度をすべて善意に解釈し、彼女を喜ばせるような他の資質を廓大して、彼女の望むような理想像をつくりあげるのである。即ち彼女は、地位も財産も名声もなく、貧しく孤独な生活をして、美術品の蒐集にこつている Osmond に Emerson 流の low living と high thinking を信条として、高潔な理想を追求するためには、世俗的な野心や、利欲を放棄することも辞さない、孤高な精神的優越者の理想像を見いだすのである。

前篇でのべたように、Osmond の一見貴族的な容姿、礼儀正しく慎しみ深い態度、寡黙で、求めず期待せず、自らに依りたのむ所のある風格、それらの外観は Isabel にかつて会つたことのない独自の人物であるという印象をあたえる。私どもは Isabel もまた美に対する繊細な感受性の持主であり、彼女が Osmond に惹かれたのは、彼の外観が彼女の審美感覚にかなうものであつたことを忘れてはならない。しかし、彼女の審美主義は、真理や倫理的善と一致するものであり、彼女にとって、正しく、善なるものは同時に美しくあるべきであつた。外観の端正さは、精神や人格の美と一致すべきものであつた。“Her life should always be in harmony with the most pleasing impression she should produce; she would be what she appeared, and she would appear what she was.” ということをお願いしている Isabel であるから、Osmond の外観は、何人にもまして卓越した精神、高潔な人格の表現であると思ひこむのである。これは Isabel のおかした最初の誤謬である。James は、Merle 夫人の場合と同様 Osmond の中に外観と真実のギャップを、一見洗練された教養人が同時に、卑少な背徳者でありうる実例を示しているので、真理や、美や、善の探求者で

あっても、人間の悪の観念に乏しい Isabel には、この人間性の表裏への洞察には欠けているのである。

Osmond の生活の指導原理となっているものは、極端な審美主義である。彼の住居、美術蒐集品、家具調度、生活様式はもとより、彼の精神や思考の形式にいたるまで、彼の繊細な感受性と、気むづかしい趣味によって支配されぬものはない。彼の容姿、物ごし、指一本の動かし方にいたるまで、彼の感受性の表現でないものはない。彼の気むづかしさ、内閉性や苛立ちやすさなど、すべて彼の極度に感敏な感受性の故である。彼が俗悪さや、粗野さ、露骨さをきらうのは、それらが彼の美的神経をささくれさせ、耐えがたくするからである。それ故、彼は俗世間から遠ざかり、自己流にきちょうめんに整理分類された、独自の生活圏とシステムの中にとじこもり、貴族的な傲岸さをもって世間を見おろしているのである。Ralph は、Osmond のこのような性格の危険性を見ぬいて、Isabel に忠告する。

“He’s the incarnation of taste. He judges and measures, approves and condemns, altogether by that. It’s exquisite, indeed, since it has led him to select you as his bride. But have you ever seen such a taste—a really exquisite one—ruffled?”

Osmond の超俗的な生活態度、諦観的なペシミズム、学問や芸術への愛好、美術品蒐集の趣味、娘 Pansy への愛、これらの特色はすべて Isabel をして、Osmond をオリジナルな精神的貴族として憧憬させたものであるが、その実これらはすべて、Osmond 自身の優越者としての自己意識を満足させる形式と外観にほかならない。彼の人生論や、学問芸術を語る言葉には韜晦趣味があって、Isabel を幻惑こそすれ、真に彼女を啓蒙するものではない。理解にさとい筈の Isabel はしばしば、理解に苦しむことがあるが、彼女はそれが Osmond の趣味教養の高遠なためであると思えずごし、自分の浅薄さや、粗野さを Osmond に批判されることをおそれて、卒直な自己表現をはばかりの気遣いをするのである。

Osmond の生活圏は、鋭敏な感受性と、洗練された趣味によって統一され、それ自体調和と秩序のある一つの美しい世界を形づくっている。し

かし、それはまた一つの Narcissism 的世界であって外部に対しては全く閉鎖的である。人間関係に関しては、相手を彼の一従属物としない限り、何人とも分ち合うことが出来ない唯我的世界なのである。このような Osmond 的の性格の創造については、Ralph が James の分身であるように、Osmond が James のかくれた性格の一面の投射であると考えすることは不可能ではない。Ralph が James のより寛容で、ヒューマニスティックな一面を代表しているとすれば、Osmond は、繊細な感受性と、シニカルな批評眼をもった、狷介孤高で、しかもうつぼつたる権力意識をかくした芸術家 James の潜在的な ego の反映であると考えられるであろう。Ralph と Osmond の間には、あきらかな共通性がある。二人とも趣味と鑑賞に生きる知識人であり、Ralph は病弱のため、Osmond は人間ぎらいなため、世間から身を退けて、人生の批評家としてとどまっている点は James 自身の人生態度と符合している。しかし、二人の間には本質的な相違がある。James は Isabel をして、二人を次のように比較させている。

He had consulted his taste in everything—his taste alone perhaps, as a sick man consciously incurable consults at last only his lawyer: that was what made him so different from every one else. Ralph had something of this same quality, this appearance of thinking that life was a matter of connoisseurship; but in Ralph it was an anomaly, a kind of humorous excrescence, whereas in Mr. Osmond it was the keynote, and everything was in harmony with it.

二人の間には、人生や人間を鑑賞批評の対象としてながめる態度に共通点はあるが、Osmond はそれらをすべて審美的見地からながめ、評価し、判断する。Ralph の鑑賞は芸術は芸術、人間は人間であって、人間を芸術に従属させることはない。Ralph の鑑賞的態度の根底には、ヒューマニスティックな人間観があるが、Osmond の鑑賞眼の底には人間否定の思想が横たわっている。Osmond は芸術至上主義が人生観の基調となって、人間性を無視するにいたる危険な例を示している。Ralph と Isabel の関係は、われと汝の人格関係であり、Osmond と Isabel の関係は、われと物

の関係であって、Osmond によれば、夫婦の関係でより重視すべきものは、形式と体面とであって、実質的な人格関係は否定されている。Osmond が Isabel に関心をもったのは、彼女の容姿や個性が、独自の審美的価値をもつものとして、彼の鑑賞眼を満足させたからである。が一般に Osmond は彼の感受性がうけ入れ、美意識をたのしませぬものはすべて俗悪なものとしてしりぞけ、人間の交際も人格的感情の交流を欠くために、容易にあき、従って人ぎらいである。Dupee は Osmond の性格を modern perversity の一例であるといっているが、¹ 今日のパ病理学的診断をすれば、彼は分裂性性格者の特徴を示しており、その中でも「貴族的微細感者」のタイプに属するであろう。高良武久氏によれば、このタイプに属する人々は「きわめて繊細な神経をもち、すべて俗なるもの、酒や煙草までも嫌う。交友は厳に選択したものに限る。身だしなみは痛々しいほどに敏感で、アイロンのかけ方がすこし悪くても気分をそこなう。個人の交際では容易に傷つけられ、一片の過言で長年の友情を冷却させる。中庸のおもむきがなく、惑溺になるか、氷のように冷酷になるかである。卒直、解放的な所がなく、人をして親しみにくい隔たりを感じさせる。居心地のよい静かな環境では、巧緻懇懃、人を魅するほどの優しさがある。それでもなお冷たい息吹きをもっている。繊細な虚飾心と、銜氣的な社交性がある。芸術に対する感覚は細微に洗練されている。」

Ralph に言わせると、Osmond は「趣味の権化」であり「自分のことのみを重視する、利己的で、卑少な人物」であり、「不毛のディレクター」である。しかし Isabel は、そのように Ralph に忠告されても、繊細で洗練された趣味の持主であることに難すべき余地があるかと思ひ、また自分を尊重する人間ならば、当然他人の人格をも尊重するはずであると、ヒューマニスティックな立場から Osmond を善意に解釈する。Isabel の誤謬は Osmond の自我的世界の中に自己の延長——独自の優越者の理想像のみを見て、人間相互の人格的な関係をはばむ、不毛の自己中心性を

¹ F. W. Dupee, *Henry James; His Life and Writings*, Doubleday & Co., New York, 1956, p. 101.

見のがしたことである。もし彼女が、今少しリアリスティックな眼で Osmond を観察すれば、そこには心を寒からしめるような Osmond の限界を見いだすことも出来たはずである。Osmond が自分のことを provincial であるといい、また “I’m not conventional; I’m convention itself.” と、厚かましい宣言をしても、その厚かましさ故にかえって Isabel はその真意を見ぬきえないし、ローマ法王のような尊敬を勝ち得たいという、彼のうつぼつたる権勢欲がみたされぬために、一見、諦観的な自己放棄の人生を送らせている Osmond のつむじ曲りな性格の真相を看破するには、Isabel はあまりに純真素朴である。Osmond が、自分の人生観は「出来るだけ、単純に、思い煩わず、労せず、もがいたりあがいたりしないことです」といい、また、彼の人生は「生れつきの無関心を肯定しているのではありません。私にはそういうものはなかったのです。それは、よくよく考えた上での故意の放棄なのです」と語るときも、Isabel はその自己放棄を、「Correggio のほかの一切を棄てることの出来る」、高潔な精神主義にもとづくものと思ひこむのである。

ひるがえって、Osmond が彼女を妻としてえらんだ動機を考えて見よう。彼は美貌と、財産と、人をあかせぬ才気や想像力をもった Isabel を持ち前の鑑識力で高く評価し、彼女を自分のものとしたいと切望したのは事実である。一種の精神主義者である彼は、Isabel が彼の中に見出したと同じように、彼女の中にまれなオリジナリティと、柔軟で新鮮な精神を見出し、それを賞でたのである。しかし、それは彼女の心の美質をそれ自体として尊重したのではなく、彼自身の精神を反映させるのにふさわしい器として賞美したのであり、彼によれば Isabel はいわば、食後の果物を盛り、彼の眼と心をたのしませる優美な銀器なのである。

What could be a finer thing to live with than a high spirit attuned to softness? For would not the softness be all for one's self, and the strenuousness for society, which admired the air of superiority? What could be a happier gift in a companion than a quick, fanciful mind which saved one repetitions and reflected one's thought on a polished, elegant surface. . . . His egotism had never taken the crude form of desiring a

dull wife ; this lady's intelligence was to be a silver plate, not an earthen one—a plate that he might heap up with ripe fruits, to which it would give a decorative value, so that talk might become for him a sort of served dessert.

Osmond が望んだことは、Isabel の柔軟で、知的な精神に、彼自身の趣味趣向、思想や感情のすべてを吸収させ、反映させ、彼の好みのままに彼女の魅力を作り直すことであった。彼はいわば人生上の artist であって、「人間は、自分の人生を一個の芸術品としなくてはならないのです」というのが彼の信条なのである。Osmond は、そのような審美的人生観に従って、彼自身の外観と形式を彼の望むものに近づけようと努めた。根なし草のような、国籍離脱者にすぎない彼が羨望するのは Warburton のような生れながらの貴族であり、またトルコのサルタンや、ローマ法王のような専制的な権威者である。彼はヨーロッパの第一級の紳士としての体面をととのえ、スタイルに凝り、外観の優雅さ、礼儀正しさ、節度を守り、精神的に卓越した人士としてのポーズを意識的に作りあげることが出来た。彼が Isabel を幻惑した great man の印象は、彼の生活様式のすべてがそうであるように、十分に効果を計算した上で作りあげられた、巧緻な技巧の結果である。芸術や歴史への愛好、洗練された趣味、貴族や教会で代表される古きもの、伝統や、慣習や、権威に対する尊敬などは、すべてヨーロッパの尺度標準を見ならったものである。このようにして Osmond は自分のアメリカ人たる育ちを極力否定しようとするのである。しかし、Osmond は本質的に精神的貴族とはなり切れぬ俗物性に支配されている。その実、彼は財産や、物質や、名誉や、権勢に対して垂涎おく能わざる野心をかくした snob であり、pedant であって、Isabel との結婚と、その後の生活ではその欲望はおそろしいほど露骨に現わされるようになるのである。Isabel を幻惑した孤高の精神主義者 Osmond は、その実は、野心や、権勢欲をみたしえない不満のため、人間を嫌い、世間を蔑視することによって自己満足をえている、つむじ曲りな人物なのである。James は Osmond の中に、ヨーロッパ崇拜の結果、皮相な伝統主義者、形式主

義者となった外国人の自己矛盾を指摘しているのだと思われる。

しかしながら、以上のような人生上の artist である彼がつくりあげた外観と形式とがあまりにも完璧であったために Isabel をして “he was fine, as fine as one of the drawings in the gallery above the bridge of the Uffizi.” と嘆賞せしめるほどであった。彼は、すでに娘の Pansy を自分の方針に従って「個性の放棄、教会の権威」を表徴する修道院で古風な教育をうけさせ、父親の意志を至上命令としてうけ入れる、人形のように無意志な少女に仕立てていた。Isabel が Pansy にあったときの最初の印象は “even Mr. Osmond’s diminishing daughter had a kind of finish that was not entirely artless.” であり、Pansy に懸想した少年 Rosier は彼女のことを Velázquez えがく所の少女のように、非の打ち所のない芸術品だと思うのである。しかし、Pansy は、自分の心情の要求をすべて抑圧するように躡けられて、いつまでたっても子供のままで、人間的に成長しないのである。James が、新大陸で自由教育をうけ、自己の信条に忠実に生きることをモットーとするアメリカ娘の典型としての Isabel と、旧世界の慣習制度のわくの中で、自分自身である前に、長上の命令に従って、躡正しく育てられるヨーロッパの上流家庭の jeune fille の極端な例を対照的に描いている点は注目に値する。

Isabel は、Osmond の形式主義の生んだものを全人的な印象としてうけとり、その上に、彼女の想像に従って、さまざまな人間的要素をつけ加えた。しかし、彼女が見のがしたものは、Osmond の形式的完成を支えるべき、人格的要素の空疎さ、人間性の欠如ということである。彼女は Osmond の不遜な自己中心性と、人間を魂ぬきの美術骨董品と同一視する、おそるべき審美主義が、彼女との人格的関係を不可能にするものであることを見ぬきえなかったのである。Osmond は、結婚前には、たしかに Isabel を愛し、理想的な求愛者の役割をはたした。彼女は、魅力と、才智と、財産を合わせもった得がたい獲物である。彼が羨望する Warburton 卿のごとき求婚者をしりぞけたほどの Isabel は、彼の所蔵する蒐集品の中でも、もっとも貴重な逸品となるであろう。彼が Isabel を愛し

たのは、彼の鑑賞眼にたえる芸術品に仕上げるための素材として愛したのであって、結婚後、彼女が「あまりに多くの考え」をもち、彼および彼のシステムを批判する女性であることを知るに及んで、彼の想像はうち破られ、彼女をにくむにいたるのである。彼は、結婚前にも、このことを彼女の唯一の欠点と見なし、速かに排除すべきものと考えた。ところが、彼女が牢固とした自己をもった女性であり、しかも彼と対立する理想と、価値観をもった人間であることを知って、彼は欺かれたと感じるのである。

前篇でのべたように、Ralph も Isabel に自分の想像を托した点は Osmond と同様である。Ralph も Osmond のように人間の鑑賞家であるが、彼は Isabel を芸術品と見るより、先ず Isabel の中に人間を見るのである。Isabel が Gardencourt について問もなく、Ralph は彼女を案内して、画廊の絵の蒐集品を見せてまわる。Ralph は絵に見いる Isabel の清楚な姿から目を離すことが出来ず、芸術品よりは、彼女の方が見るねうちがあると思う一節には、Ralph の人間観の暗示がある。Ralph が Isabel の上に想像したことは、人間としての Isabel が自由な自己発展をすること、自己実現の自由を享受することであって、Osmond のように Isabel の考えも、意志も、感情も封殺して、彼の独善的な自我のシステムに従わせることではなかった。Ralph の Isabel への評価は無限に自由であり、Osmond のそれは専制主義者の掟によるのである。Isabel は Gardencourt では、本来の彼女自身を気がねなく表現することが出来る。しかし、Osmond の前に出たとき、彼女は、彼の偏狭な批判の目の下で自分を小さく示さねばならぬ必要を感じる。Osmond の想像は Isabel が自己を主張するときに破れるが、Ralph の想像は Isabel が自己表現の自由を失ったときに挫折するのである。

II

結婚後三年ぶりで、ローマの Osmond 邸で、私どもが会う Isabel は、おどろくほど大きな変貌を示している。それは明らかに Osmond の影響力である。彼女は黒の装おいの似合う、優美な貴婦人となっているが、今

の彼女には、昔のような少女らしい無邪気さ、卒直さ、熱意がなくなり、その容子は前より控え目で、自信なげな所が見える。容姿や表情にも、どこか不自然で、機械的な所がある。その変化は Ralph をして次のように感じさせるていのものである。

The free, keen girl had become quite another person ; what he saw was the fine lady who was supposed to represent something. What did Isabel represent? Ralph asked himself ; and he could only answer by saying that she represented Gilbert Osmond.

それは、Osmond との生活の中で、体面と、儀礼と、自己防禦のマスクをつけざるをえなくなった Isabel の外観であるが、その端然とした外観の下には、彼女の内的生活の混乱と破綻がかくされているのである。結婚後の彼女は、本来の自分を出来るだけ切り縮めて、夫 Osmond の趣味や、見解を演出する人間になっている。彼女は物をいうにも、夫の顔色をうかがい、批判的な目の下で、本能的に自己防禦の姿勢をとるようになっている。

彼女が結婚生活で、徐々に目をみひらかされたのは、夫の本性についての彼女の思い違いであり、Osmond ほどすぐれた知性と感性をそなえた教養人が、同時に非人格的で、卑少な人間でありうるということである。教養人は同時に徳性もまたすぐれた人物なのだという Isabel の予想は裏切られ、夫がかえって軽蔑に値いする人間であったという発見は、Isabel をいいがたい失意と自責の念へおいやる。「あまりに多くの考え」をもった Isabel は、Osmond こそそれを分ち合い、彼女をより高尚な世界へと導くべき相手と信じたのであるが、Osmond がもっとも嫌うのは、Isabel の考えそのものである。のみならず、彼の要求することは、彼女の性格、思想、判断のすべてを放棄し、彼のそれをうけ入れることである。しかるに彼女が Osmond の中に発見したことは、かつて彼女を幻惑した優越性や独自性は、ひややかな利己主義と、人間蔑視の異名にほかならぬということである。Osmond は一再ならず人生の卑少さ、人間の無知蒙昧、墮落、俗悪を説いて、それから超越して、純粋な精神的価値を追求することこそ、

もっとも望ましいことだと教えた。しかるに、Osmond の人をよせつけぬ神聖不犯の生活は、実は、世間から尊敬や賞讃をうるための計量されたポーズである。彼の生き方は一方に、俗世間を軽蔑しながら、他方に俗世間の基準をたえず念頭においての演出なのであって、その動機は超俗的どころか、もっとも卑俗なのである。

It implied a sovereign contempt for every one but some three or four very exalted people whom he envied, and for everything in the world but half a dozen ideas of his own.... But this base, ignoble world, it appeared, was after all what one was to live for; one was to keep it for ever in one's eye, in order not to enlighten or convert or redeem it, but to extract from it some recognition of one's own superiority. On the one hand it was despicable, but on the other it afforded a standard.

Isabel は、彼の演出に瞞著された世間の中の最たるものであった。

Osmond の尊重する貴族的な生活、芸術文化、礼節や伝統などは Isabel がヨーロッパ文化の中に見出した、彼女の精神主義に訴える価値観である。彼女にとって貴族的な生活とは、該博な知識と、世俗的な些事にとられぬ大きな自由とが結合された精神生活を意味する。また知識は義務感をあたえ、自由はたのしみをあたえるべきものであった。伝統や慣習ということも、生活の秩序や、礼法、品位などを意味するもので、彼女の精神形成に役立つ価値として考えられるものである。しかるに Osmond の貴族趣味といい、伝統尊重といい、礼法といい、すべては形式と体裁である。その固定化し、形骸化した様式は、人間本来の要求や主張をはばみ、人格的生命の流れを淀ませてしまう性質のものである。Osmond の人間と、その生活は、その中に導き入れられた Isabel にとっては、個性の伸展をはばみ、萎縮させ、窒息させる一種の精神的牢獄にほかならない。

It was the house of darkness, the house of dampness, the house of suffocation. Osmond's beautiful mind gave it neither light nor air; Osmond's beautiful mind indeed seemed to peep down from a small, high window and mock at her.

Osmond は彼自身の生活と思考のシステムを最上のものと考え、それに合わぬ Isabel の個性も、意志も、見解もすべて排除し、彼の鑄型に合

わせて彼女を作り直そうとするのであるから、一口にいえば Isabel の主体的人間たることの放棄なのである。

Osmond と Isabel の結婚は、両極に立った人間の結びつきである。Isabel は、新世界を代表する浪漫的な自由主義者であるのに反して、Osmond は旧世界の価値観を標榜する、保守的な正統主義者である。一方に人間性尊重の精神と、道徳的純潔さがあり、他方に、人間性蔑視と、形式尊重に加えるのに、人倫的な欠陥がある。このように対立する傾向をもった二人の人間が、お互いのイリュージョンの上に結ばれた所に、この結婚の悲劇の胚種がひそんでいるのである。

III

この物語の後半で、James は次第にヒロインの内面の意識の動きに照明を集中してゆく。夫 Osmond との間にかえがたい溝がひろがる一方、夫と Merle 夫人との関係に対する疑惑、Warburton 卿と Pansy の結婚問題に関して、良心と夫への義務の念の間のディレンマなど、身うごきのつかぬほどに緊迫した人間関係の中におかれた Isabel の心理的迷宮を描き出す James の筆は、彼女が夜を徹して、冷えてゆく暖炉の火の前で自分の心とむかい合い、こし方行く末をかえりみ、自分のとるべき正しい道を探ねめぐむ有名な内的独白の章で、その頂点に達している。

Isabel の天性の美しさの一つは、誠実と献身の心である。彼女は、Osmond に対する不信と軽蔑をふかめながらも、なお夫に忠実であろうとし、夫を喜ばせるために、自己を曲げてまでも、万事につけて夫の代弁者であろうと努める。結婚は、彼女が選択した行為であり、衆人の前でなされた誓約による神聖な人間関係であるからには、彼女にとっては、永続的な義務と責任とを意味し、簡単にこれを解消することは彼女の望む所ではない。結婚後の Isabel の変化は、最大限に自己を切り縮めて Osmond に忠実であろうとする妻としての Isabel の努力であり、また自由意志でえらんだ結婚に対して、責任を貫こうとする意志的な努力なのである。かつて、彼女が Warburton 卿の前で予言したように、彼女は今や、自分のえ

らんだ人生の途上で、不幸と患難に直面したのだが、彼女は、この苦難を逃れることを潔よしとしない。不幸を見ぬいた Henrietta の “Why don't you leave him?” という問いに対して、彼女の答えは “One must accept one's deeds. I married him before all the world; I was perfectly free. . . . One can't change that way.” ということにつきるのである。

Ralph 危篤の報をめぐって、彼に会いに行こうとする Isabel を、Osmond が結婚の神聖さの名によって阻もうとする場面で、二人の関係には危機が到来する。すでに Merle 夫人と夫との情事の秘密を知った Isabel は、二度とローマに帰らぬ予想の下に、夫の命に背いてイギリスへおもむく。にも拘らず、最後の章で、何故 Isabel は Goodwood の救いの手を拒否して、ふたたびローマへ帰って行ったのであろうか。この点は、批評家の解釈のもっとも紛糾する点である。というのは、小説はそこで突然終わっていて、彼女の不可解な行為とその後の成りゆきについて、James はなんの説明も暗示もあたえていないからである。彼自身は、序文の中で

The obvious criticism will be that it is not finished—that I have not seen the heroine to the end of her situation. . . . The whole of anything is never told; you can only take what groups together. What I have done has that unity—it groups together. It is complete in itself—and the rest may be taken up or not, later.”

とのべているが、このように物語を未解決で終らせている James の意図は、人生とは濃密で、不明確なものであり、また人間の意識も複雑微妙なものであって、先に何ごとが起るかについて軽卒に断言することは出来ないということにあるように思われる。もし彼女が Goodwood の求愛を受け入れれば、この小説は happy end で終るが、同時に安手なメロドラマに墮することは必定であろう。また、この書の全体を通して照明をあてられてきた Isabel の体験のきびしさ、その意識の深刻さは、そのような happy end をかえって空々しい、場ちがいなものと感じさせるであろう。Isabel の結末における行動は Isabel の性格と運命とに少しも矛盾しない事柄である。

この行為の動機について、ある批評家は、Isabel の Pansy に対する約束の履行にあるとし、またある批評家は、自分の誤ちを世間に公表したくないという Isabel の誇り高い性質に帰している。またある解釈は Osmond が別れる前に強調した、結婚生活の神聖なきつなど、世間への体面と名誉の維持にあるとしているが、また自由意志でえらんだ行為に伴う義務と責任を遂行しようとする Isabel の道徳的誠実さと解釈することも出来よう。これらの解釈は、いずれも Isabel の性格と抵触するものではないが、それでも読者は完全に満足しないかも知れない。現代の読者は、むしろ Isabel のあまりに自己にきびしい、禁欲的な倫理感に戸まどいを感じ、実際問題として、すでに亀裂を生じた Osmond との結婚生活をつづけ、自己犠牲の一生を送るより、過去の過失をみとめて、Osmond と袂別し、新しい生活をはじめの方がより分別ある処置と考えるものも多いであろう。しかし、Isabel の最後の行為は、James が注意ぶかく焦点をあててきた Isabel の精神の発露の頂点ともいうべきであり、また Isabel をとおして、主張しようとしている James 自身の倫理的人生観の集約であるともいえよう。ここに、この物語のクライマックスがあり、同時に結末がある。

いずれにせよ、Isabel の行為の直接的な動機となるものは、最後の場面での Goodwood の情熱的な求愛であったことは、次の引用の中に暗示されている。

He glared at her a moment through the dark, and the next instant she felt his arms about her and his lips on her own lips. His kiss was like white lightning, a flash that spread, and spread again, and stayed; and it was extraordinarily as if, while she took it, she felt each thing in his hard manhood that had least pleased her, each aggressive fact of his face, his figure, his presence, justified of its intense identity and made one with this act of possession. So had she heard of those wrecked and under water following a train of images before they sink. But when darkness returned she was free. She never looked about her; she only darted from the spot. There were lights in the windows of the house; they shone far across the lawn. In an extraordinarily short time—for the distance was considerable—she had moved through the darkness (for she saw nothing) and reached the door. Here only she paused. She looked all about her;

she listened a little; then she put her hand on the latch. She had not known where to turn; but she knew now. There was a very straight path.

Goodwood が Isabel を窮地から救おうとする懸命な努力と真情は、はじめて Isabel の心をゆりうごかし、彼の救いの手に自分を委ねることへの切望が一瞬の恍惚感とともに彼女をおそう。が、彼女はその誘惑に抵抗し、Goodwood の抱擁からのがれ去るのである。Goodwood の情熱的な行為は、それまで迷いと逡巡の中でなす術を知らなかった Isabel にゆくべき straight path を示す動機となったといえる。この Isabel の拒否にも彼女本来の純潔さが現われているが、それ以上に Goodwood の提供する自由——「全世界は僕たちの前にある。世界はひろいのです」という言葉は、自由の限界を身をもって知った彼女には、もはや空虚な観念としてしかひびかない。現在の彼女には、Goodwood との結婚生活に幸福や自由を期待することは出来ない。それこそ彼女の運命から逃避することである。Goodwood との安易な幸福へのがれるよりも、一たん結ばれた契約の義務を守りとおす方が、貞潔な彼女にとってはより意味ふかいことと思われるのである。彼女の行くべき道はすでに示されていたが、Goodwood との出会いが彼女の迷いを一掃して、ローマへの道へと戻らせたのである。しかし、ローマへの道は、牢獄にひとしい Osmond との生活へと一直線に通じている、苦難にみちた道なのである。Isabel のこのたびの選択は、彼女が自由意志で最善と信じてえらんだ行為の結果は、一切責任を負わねばならぬという、きびしく誠実な倫理観に根ざしている。その行為は、前篇でも言及した、彼女の受苦の精神の発露である。彼女は Warburton 卿にむかって、“I can't escape my fate. I can't escape unhappiness.” といい、Henrietta にも “One must accept one's deeds One can't change that way.” と言明したように、自分のえらんだ道を貫くためには、その道に不幸と苦悩のあるべきことは当然であり、それを回避することは誠実の謂ではない。彼女はそれを超克した所にしか報償を見出さないのである。もとより、この結婚は、奸智にたけた Merle 夫人と Osmond によって設けられた陥穽であって、必ずしも彼女が全責任を負う必要はな

い。が、彼女の自己を律するきびしさは、あやまった選択に対して、彼女の償わねばならぬものが長い半生であったとしても、それを意に介しないのである。そして、このことは Isabel のように、能動的な受苦の精神をもったものにもみ可能なことである。Ralph の死の床のそばで、Isabel は「苦悩はもっとも深いものではありません。それよりももっと深いものがあります」と語る。この言葉の暗示するものは、彼女が Gardencourt にはじめて来たときのように、人生の不幸も悲惨さも知らぬ少女ではなく、苛酷な現実世界に直面して、苦悩を経験し、その苦悩の深みで、貴重な心の開眼をえて、より成長した人間になろうとしているということである。春の麦ふみの季節に農夫の足の下に踏みつけられる麦の苗が一そうすくすくと伸びるように、Isabel の精神は、苦悩を土台として、さらに成長する強靱さをもっている。

Suffering, with Isabel, was an active condition; it was not a chill, a stupor, a despair, it was a passion of thought, of speculation, of response, to every pressure.

James は、Isabel が苦悩に直面して押しひしがれ、絶望と沈滞におちいる受動的な精神ではなく、かえって、それが彼女の精神の反応を活発にし、苦悩をスプリング・ボードとして、さらに別の境地に浮び上ることの出来る能動的な精神の持主であることを示唆している。この受苦の精神は、すでに Warburton 卿の前で、彼女自身の運命を予言した言葉の中にも示されていた。

彼女は、今や自分の選択の誤まりをみとめ、知性の迷妄からめざめさせられた。夫 Osmond の正体を見きわめ、理想と現実との大きなギャップをも認識した。もっとも緊密であるべき夫婦である故に、もっとも深い孤独と、人間関係の困難さをも経験した。「世界は無限にひろく、えらんだことは何でも出来る」という、彼女の楽天的な自由の幻影は打ちくだかれ、いかに人間が現実の世界で自由になり難いものか、またいかに彼女が無経験な自己を土台として、判断し、行動したかを痛感した。今後の Isabel を

とりかこむ因習の壁は、彼女が外部に向って自己を主張し、拡大することの術なさを告げている。Osmond の専制的な掟の下につづけられる生活は、彼女の renunciation の完璧であることを予告している。このように Isabel の現実の認識と、将来への見通しは、今では暗澹としたペシミスティックなものになっている。しかし、彼女のえらんだ renunciation の道は文字通りの忍従と、諦めと、無関心の人生を意味しているのであろうか。彼女の renunciation は、冷酷な現実直面して、挫折の憂目をみた理想主義の末路にすぎないのであろうか。純良で正しい魂が悪によって傷つけられ、敗北させられた悲劇の結末であらうか。また根づよい因習の中で、一切の自由を失った個人の虚無感のみを意味するのであろうか。James がこの一巻を通して描き出した Isabel の人間像は、そのような renunciation の否定的な意味を拒否しているように思われる。James は Isabel を、苦悩を回避せず、むしろ、すすんで苦悩の中に身をおくことを辞さない精神の持主とすることによって、彼女により深い人生の意味を探らせようとしている。James は、幸福より苦悩のより深い意味を、また苦悩の試練をこえてしか到達しえないであらう、より高い次元での自己放棄の意味を知っていた。彼は——おのれをえんと欲するものはこれを失ない、おのれを棄てるものはこれを得るであらう——というキリスト教倫理に通じる renunciation の逆説的な価値を Isabel にも見出させようとしているのではなからうか。彼女の自己を律するきびしい倫理観は、自由意志でえらんだ行為とその結果に対して自ら責任を負い、すすんで renunciation の道をえらばせている。しかし、その renunciation もまた、彼女自身の意志と決断によって選ばれたもので、外部から規定され、自己滅却を余儀なくさせられる意味の renunciation ではない。その点で、彼女の自己の主体性は依然として健在である。今の彼女は、現実の環境と自己を再認識し、renunciation の中に生をおくことによって、より内面化され、深化した自己の確立をねがおうとしているのである。今後の Isabel の人生に何ごとがおこるか、また彼女にとって、精神的牢獄にひとしいローマの生活環境のなかで、彼女がどのように身を処してゆくかは予断の限りではない。未

来の見とおしは暗く、純粹であたい高いものはかえって破壊され、すぐれた魂であるが故に、より深い苦悩をなめねばならぬ人生の不条理は Isabel の心を重く圧している。にも拘らず彼女の心の奥ふかくには、次のような一抹の希望的観測がひそんでいる。

Deep in her soul—deeper than any appetite for renunciation—was the sense that life would be her business for a long time to come. And at moments there was something inspiring, almost enlivening, in the conviction. It was a proof of strength—it was a proof she should some day be happy again. It couldn't be she was to live only to suffer: she was still young, after all, and a great many things might happen to her yet. To live only to suffer—only to feel the injury of life repeated and enlarged—it seemed to her she was too valuable, too capable, for that.

ここには、苦悩の火の中に身を投じて、さらに鍛えあげられようとする Isabel の不屈な受苦の精神と、自己を含めた人間の尊厳に対する根づよい信念がある。Gemini 夫人がいうように、Isabel はいざとなれば、Osmond より高く身を持つことの出来る、毅然とした精神の持主である。彼女はすでに Merle 夫人をあわれむことによって彼女を超えている。そのように、彼女は将来、より解放された自己の世界に立って、狭量でエゴイスティックな Osmond を審く日が来るかも知れないのである。

この書の結末では、Isabel の将来の幸福への約束は何ひとつとしてあたえられてはいない。にもかかわらず、作品を一貫して示されている Isabel のきびしく、清潔な倫理性と、そして、苦しみにみちた自己否定の中から、より高い次元の肯定の世界を見いだそうとしている彼女の信念は、物語の結末に、また物語をこえた彼女の未来に、外面的な敗北を超えた魂の凱歌をひびかせるのである。

附記： この小論は東京女子大学「論集」第 XVI 卷、第一号に記載された「*The Portrait of a Lady* における人間像—Henry James の作品研究 (I)」の続篇として、併せ読んで頂きたい。

Résumé

The Ordeal of Isabel Archer — A Study of *The Portrait of a Lady* (II) —

Yuko Eguchi

This paper forms a sequel to my previous one on James's *The portrait of a Lady*, which is contained in the *Essays and Studies* (Vol. XVI, No. 1, September, 1965) published by the Academic Society of Tokyo Woman's Christian College.

The Portrait of a Lady is the most impressive and most soul-elevating of the novels of the 19th century which have a heroine as the central figure. Among these novels, *Madame Bovary*, *Anna Karenina* and many others are tragedies of passion, while *The Portrait* is a tragedy of intelligence, because Isabel Archer as the heroine is a modern, intellectual, reflective and self-reliant girl, but, at the same time, she is so innocent and so unsophisticated that she becomes an easy victim of her own logic and idealistic notions in the face of crude reality. We readers are impressed, however, by her moral integrity and her fortitude with which she tries to take the responsibility for the consequences of her act of free will, and thus affront her tragic destiny.

The Portrait owes its greatness chiefly to the artistry of James in drawing such a unique portrait as Isabel Archer as well as creating other characters with variety and vividness. I attempted to make clear the essential quality of her character by examining her relations to people surrounding her, especially to Osmond who becomes her evil fate. As a descendant of the Puritans in her unyielding courage and her moral uprightness, Isabel is a person of essentially noble, strong and developing character, and this enables her to accept her suffering, not as a result of renunciation, but as a way to a higher development of her self. James knows the meaning of suffering in life deeper than that of happiness, and, through Isabel, he shows the meaning and value of renunciation, which can be grasped only by experiencing such a trying ordeal.